子どもが目的意識をもち 互いの考えを理解し合おうとする学習

上　田　雅　人

1　条件設定に当たって

思考力・判断力・表現力等を育む学習活動には，「なぜ」「どうして」という疑問を子どもがもち，自ら追究していく学習展開が求められる。それは，目的意識を明確にした課題解決への意欲が学習を主体的なものとし，解決の過程で思考や判断・表現の必要を生じるからである。また，「目的のもとに種々の情報から適切な情報を選択する」力が判断力であるとの考えからも，「であう・つながる・うまれるコミュニケーション」には，学習活動での子どもの目的意識が重要であるといえる。さらに，表現力も子どもが明確な目的意識をもった上で初めて的確に表現することができるのである。

課題解決の過程で，子どもが自分の考えをよりよいものにしていこうと自ら仲間とかかわる学習展開も重要である。なぜなら，かかわりによって，異なる見方や考え方があることに気づき，自分の考えを見つめ直し新たな考えへと高めることができるからである。そのため，仲間との目的意識の共有も大切になってくる。

目的意識が共有されていない話し合い・聞き合い活動では，意見の羅列になり互いの話を聞く必要感を生じない。目的意識を共有し，共感的あるいは批判的なやりとりが，思考力・判断力・表現力等の力へとつながっていくのである。つまり，子どもが目的意識をもって学習に臨み，主体的な学びの中で互いにかかわり合いながら，話し手の意図を理解し，自分の考えを見つめ直していく活動が子どもの思考力・判断力・表現力を育んでいくのである。

以上の考えをもとに授業づくりを行っていくことにした。また，その授業にせまるために下記の３点を条件として考え実践を行うことにした。以下にその考えを述べていく。

・条件Ａ　解決に向けての見通しをもつこと
・条件Ｂ　視点や観点などの違いで多様な考えが生まれること
・条件Ｃ　話し手の意図を考え自分との思いや考えの違いがわかること

2　条件について

・条件Ａ　解決に向けての見通しをもつこと

「解決に向けての見通しをもつ」とは，自分のもっている知識を活かして考えるだけでなく，仲間とかかわり合うことによって課題を解決する学習への見通しをもつことである。

子どもは課題解決のために，これまでの学習や生活経験等から得られた知識をもとにして考える。このとき，子どものもっている知識だけで解決できる課題であれば，子どもはかかわりの必要をもたず自分の知識だけで解決していく。それでは，課題に対する子どもの「解決したい」という意欲は弱いものになり，かかわりによる自分の考えの見つめ直しも生じない。

子どものもっている知識だけで解決が困難な課題は，自分のもっている知識の中からどの知識が生かせるか考える場や，解決に向けて仲間とかかわり合う必要感を生む。

・条件Ｂ　視点や観点などの違いで多様な考えが生まれること

「視点や観点などの違いで多様な考えが生まれる」とは，「どこから見ているか」や「どこに注目しているか」など自分の見方や考え方をはっきりさせながら意見を出し合い，新たな考えに気づくことで話し合いが深まっていく学習活動である。

話し合い・聞き合い活動の中で，多様な考えが出されると学習は深まっていく。しかし，往々にして考えが画一的で単調な話し合い・聞き合い活動に終わる場合がある。これは，異なる視点や観点に気づかず，事物や事象を一面でしかとらえていないため起こる。見方や考え方を少し変

えることで新たな見方や考え方を引き出していくことが学習活動の中で大切になってくる。

・条件Ｃ　話し手の意図を考え自分との思いや考えの違いがわかること

「話し手の意図を考え自分との思いや考えの違いを理解する」とは，言葉の意味の理解だけでなく「なぜそのように考えたのか」を意識しながら話し手の考えの根拠を意識して行われる話し合い・聞き合いの活動である。

学習活動を構成する上で重要なのは「比較」である。話し合い・聞き合いの活動の中で子どもは，絶えず自分の考えと仲間の考えを比べながら学習している。活動の中で「同じです」や「違います」などがその例だが，このときなぜ違うのか，どのように違うのかまで意識できていないことが多い。「なぜそう考えたのか」，「何が違うのか」，「なぜその違いが出たのか」などを意識していくことで，子どもは気づかなかった見方や考え方に気づき，それまでの自分の考えと比べながらよりよい方向へ考えを変容させていくことができる。

話し手の意図の理解は，自分と異なる考えとのであいの場であり，新たな気づきへとつながっていく。聞き手が相手の意図を「知りたい」と必要感を感じて重ねられる話し合いは，子どもの思考をより深めていく。

自分とは異なる意見が出た時に，それを否定するか，受け入れるかでその後の学習の展開は異なってくる。日頃の学習や人間関係による部分も大きいが，相手の話を聞いてみないと分からないという状態であることが望ましい。

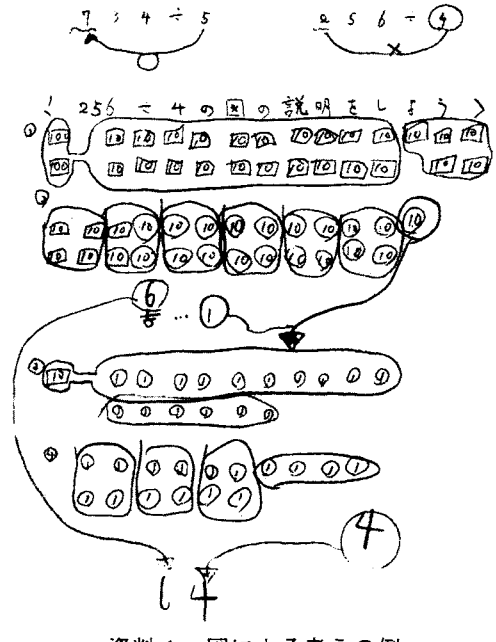
３　おもな実践

・条件Ａ　解決に向けての見通しをもつこと

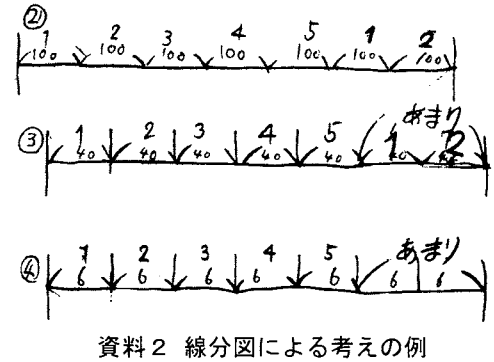
算数科「わり算の筆算」における実践

重要になるのが，課題設定の程度である。設定を低くすると子どもは知識のみで解決してしまい，高く設定すると解決が困難になる。子どもにとって難しすぎる課題設定は学習意欲をそぐことにもなり，かえって逆効果である。課題を見た時に「できる」と子どもに感じさせ，ある程度学習の見通しをもてる課題でなくてはならない。つまり，子ども自身が課題解決できたときをイメージし，そこに到達するまでにこれまでの自分の知識だけでは解決が困難なことが感じることができる課題であることが，子どもに思考やかかわりの必要感をもたせていくと考える。学年や学級の実態に応じ，適切に課題を設定する教師の手立てが必要となるのである。

この学習に入る以前から，すでにわり算の筆算を知っている子どもが多くいた。しかし，なぜ筆算で計算できるのかを問われると，うまく説明できない子どもがほとんどであった。そこで，「既習だけでは解決が困難」な課題として「三位数÷一位数の計算の仕方を説明できる」という課題を設定し，みんなで考えていくことにした。それは，計算はできてもなぜそうなるのか筆算の考え方まで理解することは，これまでの足し算や引き算，かけ算などの筆算の考え方だけではできないと考えたからである。



資料１　図による考えの例

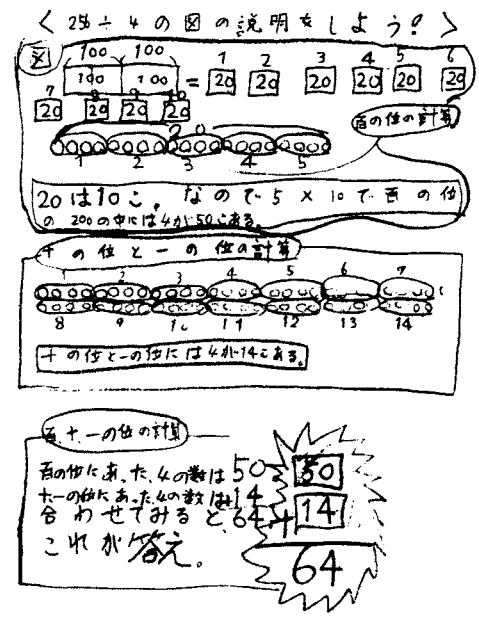


資料２　線分図による考えの例

子どもは始め簡単に考えていたようで，すぐにノートに説明を書き始めた。しかし，ほとんどの子どもが計算の順番を並べて書いているだけで考え方について書いていなかったため，一度お互いのノートを見合う時間を設けることにした。「計算の順番を書いているだけでなぜ計算できるのかの説明になっていない。」という指摘が子どもの中から出され，そこから考えを書く手がとまってしまった。これは，子どもが自分がわかったつもりになっていたことに気づき，改めて筆算のしくみについて考え始めたからだと判断できる。

しばらく沈黙の状態が続いたが，やがて子どもは近くの仲間と相談を始めた。わられる数を位毎に分ける，簡単な絵や図に書いて表すなど，あちらこちらで子どもがいろいろ試しながら考えている姿が見られた。（資料１～３）

この後子どもはわり算の筆算が，位毎の考えやかけ算，引き算などこれまでに学習してきたことを生かして考えられていることに気づき，わり算についての理解を深める事ができた。



資料３ 図による考えの例

今回の学習を通して，学習課題が子どもにとって平易であるようで実は単純には考えられない課題を設定することで，子どもが互いに話し合ったり，自分の考えを見つめ直したりする姿が見られた。

・条件Ｂ　視点や観点などの違いで多様な考えが生まれる

社会科「わたしたちのまちみんなのまち～金沢市全体の様子～」における実践

学習活動の中では事象と事象，考えと考えなど学習活動の中に様々な比較の場面がある。そこで，何と何を比較するのかどことどこを比較するのかを明らかにし，比較させていくことで多様な見方や考え方ができるようにしていく事が大切である。

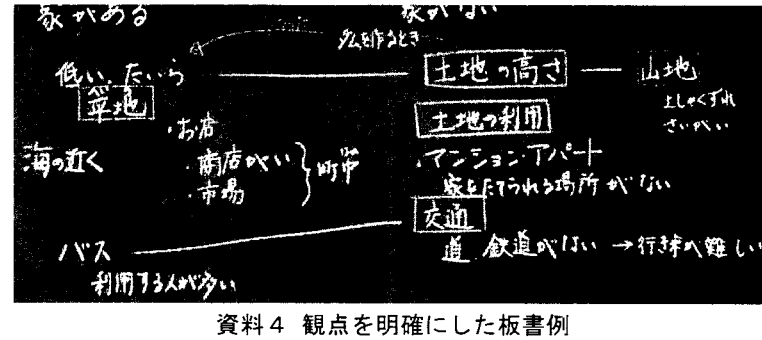
様々な見方や考え方が可能な課題の設定や，視点や観点の違いを明確にし個々の考えを明確に位置づける板書の工夫などの手立てが重要となる。

異なる視点や観点から事物や事象をとらえる事ができるようになると，さらに思考は深まっていく。

この学習でとらえる「視点や観点などの違いで多様な考えが生まれる」とは，平地，山地，台地などの地形と，住宅地や農地，工業用地など土地利用の様子とを関連させながらとらえさせることであった。（資料４）

導入で大きく市全体の地形の特徴をとらえたあと，「金沢市の北西部に人が多く住んでいる地域が広がっているのはどうしてか」を考えた。子どもは，学習した地形の特徴から北西部に平地が広がっていることが大きく関係しているのではないかと予想した。

しかし，学習の中で一人の子どもが「人が住んでいるのは山地に近いからじゃないか」という考えを出してきた。これは，大方の予想を覆す考えであり，ほとんどの子どもは否定しようとした。しかし，話を聞いてみると，その考えには理由があることが分かった。それは，その子どもが住んでいるのは金沢市の中でも海に近い場所であり，



資料４ 観点を明確にした板書例

そこから見ると人が多く住んでいる地域はたしかに山地に近い場所に広がっているのである。

ここで子どもは，自分が見ていたのは地図の中央を中心にし広がりをとらえていたこと，違う場所から見ると別の考え方ができるということに気づくことができた。改めて地図を眺めてみると海沿いなどの地域には住宅地の広がりが少ないことが分かった。地形の特徴だけでは人の住んでいる地域の広がりをうまく説明できないことに気づいたのである。このことから，鉄道や道路に目を向け交通網の広がりなどへと目を向けていくことができた。

今回きっかけとなったのは一人の子どもの発言からであったが，それ以降子どもも誰の立場から見るのかどこに注目して見るのかなど視点や観点を意識するようになった。（資料５）

資料５　観点を考えながら書いたノート

・条件Ｃ　話し手の意図を考え自分との思いや考えの違いがわかること
社会科「わたしたちのまちみんなのまち～Peace Town 探検隊～」における実践

３年生にとって社会科の導入となる最初の単元である。この中で「話し手の意図を考え自分との思いや考えの違いを理解する」とは，学校の周辺の建物や土地の使われ方など見学を通して調べたことをもとに，学校の周りがどのような特徴をもっているか考えさせる学習である。ここで，一人一人が特徴としてとらえたことが，どこに目をつけたのか，何に注目したのかを意識しながら聞きあうことが話し手の意図を考えることができるようになると考えていた。

何回かの見学で学校の周りにどのような建物が多くあるか，土地がどのように利用されているかを知って，そこから学校の周りを四方位に分けて特徴を考えることにした。子どもからはたくさんの意見が出た。しかし，「ビルがあった」「自衛隊が大きかった」など目についた物をそのまま挙げている子どもがほとんどだった。

そこで，改めて「なぜそれが特徴だと考えるのか」を問うた。そうすると，同じ「自衛隊」を特徴に挙げている子どもでも，「広さ」に着目して考えている子どもや出入りする車に着目し「交通」から考えている子どもなどそれぞれだった。

この後の学習では，「なぜそれが特徴だと考えたのか」理由を可能な限りはっきりさせながら考えの交流をさせた。子どもは，同じ特徴を考えてもその根拠が違ったり見方が違ったりすることや，同じ根拠でも異なる特徴を挙げることがあることに気づくことができた。

これが言葉だけの理解で終わっていれば自分と同じ，あるいは違うと一言で片付いてしまった内容である。しかし，相手の考えの意図を理解しようと努め，根拠や見方の違いに注目することによって，比較することでの気づきの大切さがわかってきた。

４．今後に向けて

子どもにとって，どの程度で課題を設定することがより効果的に思考の場面を生み出すかは今後さらに実践を重ねていく必要があるが，一つの方向は見いだせたと考える。

また，現時点では視点や観点を確認してから話し合い・聞き合い活動を行うことで，意図を考え自分との思いや考えの違いに気づくことができている。今後は，子どもが自分で視点や観点を意識しながら話し合い・聞き合い活動に取り組んでいくことが望まれる。